



社会実装看護創成研究センター設立 5 周年記念シンポジウム
報告書

社会実装を志向した看護学研究の展開



2025 年 12 月 1 日

藤田医科大学保健衛生学部社会実装看護創成研究センター
愛知県豊明市

藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター設立 5 周年記念シンポジウム 報告書

目次

はじめに	1
社会実装看護創成研究センター設立から 5 年間の歩み センター長／教授・須釜淳子	2
シンポジウム1 ケアの質を革新する看護技術の社会実装 司会 センター長／教授・須釜淳子	4
シンポジウム2 看護職の知的実践を拓く：臨床現場と研究の架橋による人材育成 司会 センター教授・村山陵子	11
シンポジウム3 看護部と創る臨床研究の新展開 司会 藤田医科大学病院看護部長・高井亜希、センター准教授・小柳礼恵	18
講評 保健衛生学部長・長谷川みどり	25
おわりに センター長／教授・須釜淳子	26
資料	27

はじめに

本報告書は、2025 年9月6日藤田医科大学保健衛生学部3号館で開催された社会実装看護創成研究センター設立 5 周年記念シンポジウムにて発表された内容の要点を総括するものである。メインテーマを「社会実装を志向した看護学研究の展開：技術革新・人材育成・臨床連携の 5 年間の実績と展望」とした。当日は、看護学科教員、教育病院看護管理者、看護師など総勢 113 名が参加した。本報告書は、シンポジウム録音データからテキストに変換した文書ファイルを作成し、Microsoft365 Copilot を利用して要点をまとめたものである。

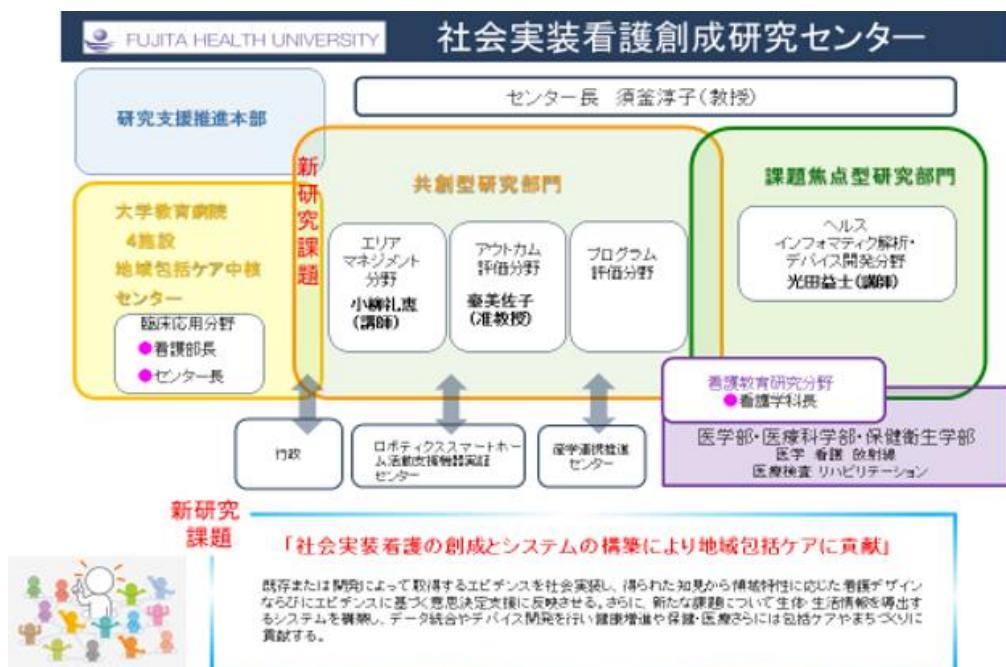
シンポジウム開催のねらいは、センターが蓄積してきた知見や取り組みを振り返り、「何を残してきたのか」を参加者とともに考える機会とすることと、大学組織の中に看護研究センターを持つことの意義についても、議論を深めたいことの 2 点であった。このねらいの下、同シンポジウムでは、3 つのテーマが設けられ、各シンポジストが発表を行った。また、すべての発表終了後に、保健衛生学部長から講評がなされた。

シンポジウムに先立ち、藤田医科大学統括看護部長・眞野恵子氏より、社会実装看護創成研究センター設立 5 周年を祝し、日頃からの看護師への研究支援に対する深い感謝の意が表された。特に、臨床現場における研究活動の推進において、センターの存在が大きな力となっていることが強調された。得られた知見は看護実践に活かされ、患者ケアの質向上にもつながっている。臨床と研究の融合を実現する場として、センターの活動が着実に成果を上げていることが評価された。今後も、センターが地域社会や医療の発展に寄与し続けることへの確信が述べられた。看護部としても、研究と社会実装を通じて、より良い看護の未来を築いていく姿勢が示された。今後の協働への期待が込められた力強いメッセージであった。

社会実装看護創成研究センター設立から5年間の歩み

社会実装看護創成研究センター センター長・教授 須釜淳子

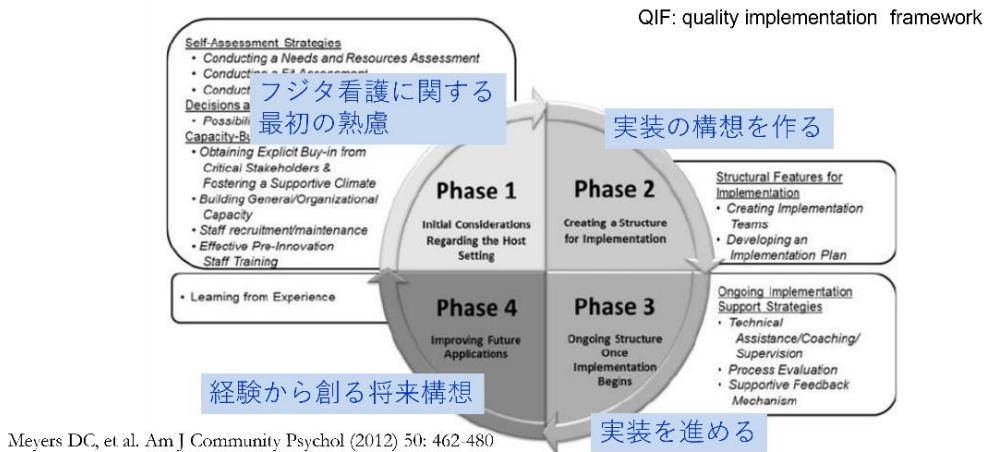
社会実装看護創成研究センターは、2021年4月に設立され4名の教員（須釜、臺、小柳、光田）で活動が開始された。センターは、研究によるエビデンス創出部門と、そのエビデンスを社会に実装する共創型部門の2部門で構成されている。少人数体制であるため、部門間の明確な分離ではなく、重なり合いながら協働的に研究活動を展開している。特に「エリアマネジメント部門」は、実装活動の中核を担っており、看護部との連携やエリアの共有・管理が重要な課題として位置づけられた。



センター設立に至った背景には、当時の学長・才藤栄一氏からの招聘があり、演者の恩師である真田弘美氏と才藤栄一氏とのご縁が契機となった。演者自身は、日本看護科学学会「摂食嚥下時の誤嚥・咽頭残留アセスメントに関する診療ガイドライン」作成の過程において、才藤氏が看護に対する深い理解と熱意を持っていることが確認され、藤田医科大学への赴任を決意した。着任時には、「藤田医科大学の看護のプレゼンスを高める」というミッションが与えられた。藤田医科大学は、全国でも早期に看護学の大学教育を開始した大学であり50年の歴史を有するが、全国的な認知度は高くなく、その向上が求められていた。着任時に金沢大学同門会から、日めくりカレンダーが贈られ、毎月1日に「あなたのリサーチマインドを藤田に根付かせてください」との真田氏からのメッセージが記されている。現在も初心を思い返すきっかけとなっている。

センターの具体的な活動として、藤田医科大学にある4つの教育病院を横断する看護研究システムの構築を目指した。病院組織と教育組織である保健衛生学部看護科をつなぐ役割としてセンターを位置づけ、研究運用体制を整備した。また、創傷看護や褥瘡研究の経験を活かしつつ、新たに「実装科学」という学問領域に挑戦した。エビデンスの普及を目的とした実装科学の進め方に基づき4フェーズを設定した。

実装科学の4ステップで進める



着任直後には、コロナ禍にもかかわらず、眞野統括看護部長の配慮で、1週間で4教育病院を訪問し、看護部との信頼関係を構築した。以降、毎月1回の看護部との研究ミーティングを継続し、その中で看護研究ニーズ調査を実施した。また認定看護師との対話を重視し、初年度には28名からのヒアリングを実施した。過去の摂食嚥下機能障害看護分野で看護師が行った学会発表を英語論文化する支援を行った。これら病院看護部との連携活動は、第一教育病院・高井亜希看護部長の論文に掲載されている（高井ら、2025）。

2022年4月には2名の教員（村山、三浦）が着任し、活動をさらに加速させた。センター教員が主導し、臨床と連携した研究を推進した。具体的にはエコーを用いたフィジカルアセスメント、IAD調査や4教育病院のがん看護を横断的に統合する活動など、多領域での研究が進行した。さらに、病院・大学・センターで臨床看護研究を支援するシステム「るび×Lab.」の構築により、研究情報の共有と支援体制が可視化され整備された。論文化支援も継続的に行われた。2022・2023年度に訪問看護ステーションの協力を得て、内閣府事業として大型の研究プロジェクト「ポータブル超音波診断装置の活用による在宅ケアでの看護アセスメント社会実装」に取り組み、ポータブルエコーを活用した地域医療の変化を調査した。

看護学科との連携も率先して行い、英語論文抄読会開催、博士後期課程進学者のリクルートや科研費申請支援を行った。

センターの研究業績として、論文数の着実な増加、研究生・院生の増加が挙げられる。また客員教員が加わることで、センターの研究に広がりを見せた。センター設立から5年を迎え、次の5年に向けた構想として「経験から作る将来構想」を始動させる必要がある。これまでの活動を振り返り、次のステップを描くために、本シンポジウムを企画した。シンポジウム1・2・3には、これまでの実装が凝縮されており、今後の展開に向けた戦略を考える貴重な機会としたい。

文献

高井 亜希, 小柳 礼恵, 佐野 友香, 真野 恵子. 大学附属病院における看護管理者の看護研究のニーズ調査と課題—看護系大学研究部門とのユニフィケーション—. 日看管会誌. 2025; 29(1): 28-37.

シンポジウム1：ケアの質を革新する看護技術の社会実装

司会 社会実装看護創成研究センター センター長・教授 須益淳子

1. 第6のフィジカルアセスメントツールとしてのエコー可視化技術の開発・普及：末梢静脈カテーテル留置技術

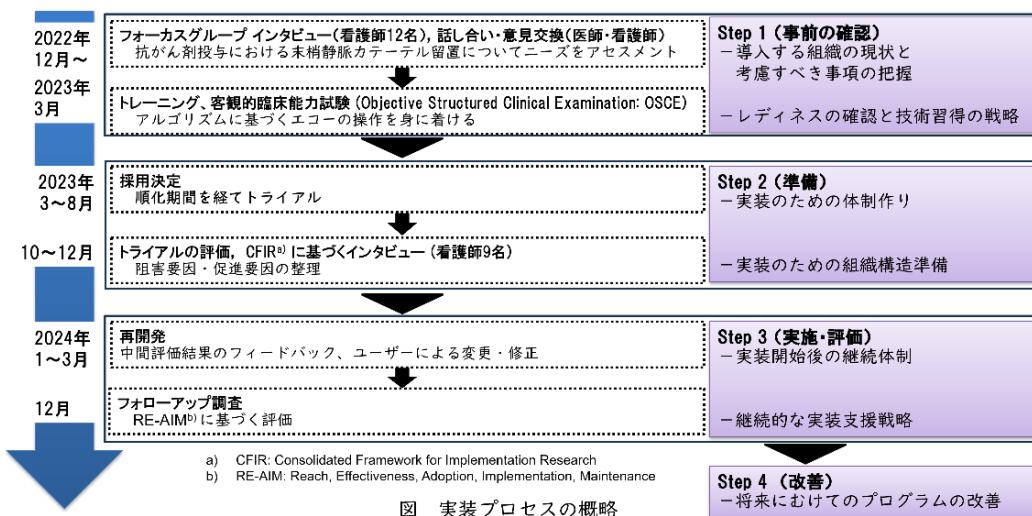
社会実装看護創成研究センター 教授 村山陵子

演者が取り組む「超音波検査装置（エコー）を活用した看護技術の実装」について紹介した。エコーは、視診・触診・聴診・打診・問診に続く「第6のアセスメントツール」として、非侵襲かつリアルタイムで体内の状態を可視化できるツールであり、近年では小型化が進み、携帯可能なサイズとなっている。

臨床現場ではエコーの有用性が認識されている一方で、実際の活用は進んでおらず、「エビデンス・プラクティス・ギャップ」が存在している。演者はこのギャップを埋めるべく、臨床と教育の両面からエコー導入に取り組んでいる。

藤田医科大学各拠点病院でのヒアリングから、末梢静脈留置カテーテルに関するトラブル、特に点滴漏れによるカテーテル中途抜去（catheter failure : CF）が課題として浮上した。CFは腫脹や発赤を伴い、輸液継続が困難となり、カテーテルを抜去せざるを得ない状態であり、患者・医療者双方に負担をもたらす。藤田医科大学着任前に、看護理工学の視点から、エコーを用いてCFの原因を観察した研究を行った。その結果、血管内皮細胞の損傷による炎症反応が浮腫や血栓形成を引き起こしていることが判明した。特に機械的要因が看護技術と関連しており、以下の3点が介入可能なポイントとして整理された。1点目は大きい血管の選定、2点目は視診・触診が困難な場合でも穿刺成功、3点目は血管内でカテーテルが刺激を与えない留置である。これらをエコー技術で補うことで、CFの予防が可能となり、実際にアルゴリズム化された手順を看護師が実施した結果、CFの発症率が減少したことを報告した。

藤田医科大学着任後、眞野恵子統括看護部長、河田健司医師、神納美保看護長の協力のもと、藤田医科大学病院外来薬物療法センターで、実装科学の枠組みに基づき、以下のステップで実装を開始した。



ステップ1：看護師12名へのフォーカスグループインタビューを実施。不安や緊張、エコーへの期待を把握し、トレーニングと技術評価（オスキー）を実施した。ステップ2：業務へのエコー組み込みトライアルを実施。使用タイミングの課題が発生し、看護師自身がアルゴリズムを更新した。ステップ3：CFIRに基づくインタビュー調査を実施。技術への自信の欠如、組織文化、リーダーシップ不足が阻害要因として判明。神納美保看護長が「チャンピオン」として体制整備を推進し、結果として肘窓への留置が減少、エコー使用率がほぼ100%に達した。ステップ4：今後の展望として、血管温存とCF予防のための技術を更新・改善しつつ実装を継続する。

さらに、令和6年度のコアカリキュラム改定により、看護基礎教育にエコー技術が明記されたことを受け、藤田医科大学での基礎教育におけるフィジカルアセスメントへのエコー活用として、教材開発や演習効果の検証を進行中である。今後、検証結果を公開し、他の大学へのエコー導入を目指していく。

教育側のニーズを確認し仲間を増やす

第44回 日本看護科学学会学術集会において交流集会を実施
藤田医科大学における基礎看護学での学内演習へのエコー導入の実際を紹介

看護基礎教育への導入

「採血」演習での血管エコー

エコー台準備：4人1グループに1台
(社会実装看護創成研究センター保有)
演習時間：20分

2人ペアで15分で①～⑦の体験をする
① エコーの操作方法
② 画像の左右確認
③ 針先において手と離れる練習
満たない動脈がある場合練習する
④ 大きく深さを確認している
⑤ 静脈の位置確認
⑥ スライス操作
⑦ 肌温帯をした場合の変化をみる
(時機があれば倍側皮静脈でも④～⑦やってみる)

IVR AIR LINQ (高コントラスト)

フィジカルアセスメントにエコーを用いるのは“あたりまえ”

2. 排泄ケアのイノベーション：多職種連携とテクノロジーで実現する尊厳ある排泄ケアの未来

社会実装看護創成研究センター 准教授 小柳礼恵

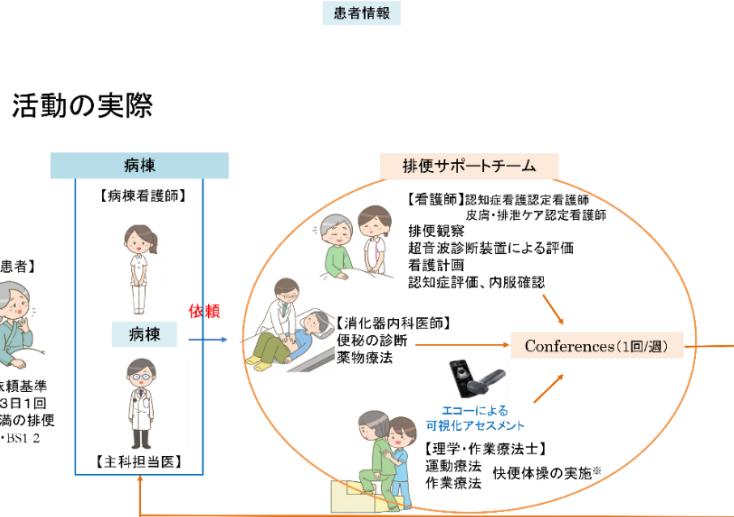
本講演では、演者が取り組む「排泄ケアのイノベーション」について、活動の背景、現在進行中の研究、そして今後の展望を紹介した。演者は看護師として34年、皮膚・排泄ケア認定看護師として24年の経験を有し、臨床・教育・研究の各領域で排泄ケアの質向上に尽力してきた。

看護師として消化器系、泌尿器科、小児病棟などで勤務し、皮膚・排泄ケア認定看護師として褥瘡管理や創傷ケアに携わってきた。博士号の学位取得後は、大学での教育・研究活動を通じて、知識・技術の継承とエビデンスの蓄積の重要性を認識した。教育者としては、学生の視野を広げ、臨床疑問を研究へと昇華させることを使命としている。

皮膚・排泄ケアの分野では、創傷、ストーマ、排尿ケアにおいて診療報酬の算定が進んでいるが、排便ケアに関しては未整備の状況が続いている。従来の排便アセスメントは、残便感・腹満など主観的評価が中心であり、便秘のタイプを正確に把握できず、不要な処置や薬剤投与が行われるケースがあった。この課題に対し、演者は超音波エコーを用いた非侵襲・ベッドサイドでの評価の有効性を提唱したエコーによる直腸内での便の貯留を可視化することで、医師・看護師・多職種が情報を共有し、適切なケア

提供が可能となった。

演者は国立長寿医療研究センターにおいて、認知症病棟での排便ケアチームの構築に取り組んできた。認知症患者は便秘の訴えが困難であり、看護師が決まりきった仕事として、確実な便の存在を確認しないまま、坐薬挿入、摘便などの処置を行う現状があった。これらの処置が食欲低下や行動悪化につながるため、根拠に基づいたケアが求められていた。エコーによる便の貯留観察技術を導入し、医師・看護師・理学療法士が連携する体制を構築し、週1回の回診とカンファレンスで情報共有を行い、患者ごとのケア計画を策定している。認知症病棟に入院する便秘患者55名を対象に、約8ヶ月間の後ろ向き観察研究を実施した。主要アウトカムは「普通便の排便の有無」であり、介入の有無による排便率の違いを分析した。結果として、チーム介入により排便率が約2倍に向上した(Koyanagi et al., 2024)。エコーによる直腸観察は、CTでは困難だったベッドサイドでタイムリーな直腸内の便貯留の確認を可能にし、治療評価にも有用であることが示された。



今後は、排便ケアのさらなる実践と評価を進め、診療報酬の新設を目指す。排便ケアに関する診療報酬獲得に向け以下の3要素が必要とされる。排便ケアに必要な知識・技術を持つ看護師の育成、排便管理に関するチーム医療体制の構築、チーム医療の効果検証である。2023年より、学会主導で16時間以上の講習会を開催し、220名以上の看護師が受講した。現在も診療報酬算定に向けた体制づくりが進行中である。また、令和6年度のコアカリキュラム改定により、看護基礎教育にエコー技術が明記されたことを受け、教材開発や演習効果の検証にも取り組んでいる。看護学生が早期からエコーに触ることで、将来的にエコーを活用した排泄ケアが「当たり前」となることを目指している。

演者は、排便ケアという看護技術の社会実装に挑戦しており、そのプロセスを段階的に進めることで、ケアの質の革新を図ってきた。今後も、後進の育成、仲間のモチベーション向上、医療経済への貢献を目指して活動を継続する意向が示された。最後に、共同研究に協力した第一教育病院の眞野統括部長、高井看護部長、佐野看護長、医師、大学関係者への感謝の意が述べられた。

展望：進むべき将来は

【WOCNとしての将来を考える】

WOCN経験の共有

知識・技術の継承

エビデンスの継承

後進WOC、
看護師の活躍

臨床疑問～研究疑問⇒解決
組織活動による啓発と普及

仲間・後進のモチベーション向上
ケアの質向上と医療経済への貢献

【教育・研究者としての将来を考える】

看護学生の視野拡大

研究結果
WOCN知識・技術継承する

後進の研究者・教育者・
実践者と共に

文献

Koyanagi H, Matsuura T, Takeuchi S, Yamada S, Ishihara T, Sugama J. Evaluation of the health care team intervention for constipation in elderly patients with dementia. J Jpn WOCM. 2024; 28 (1): 49-56.

3. 摂食嚥下の可視化がもたらす新たな食事支援

社会実装看護創成研究センター 准教授 三浦由佳

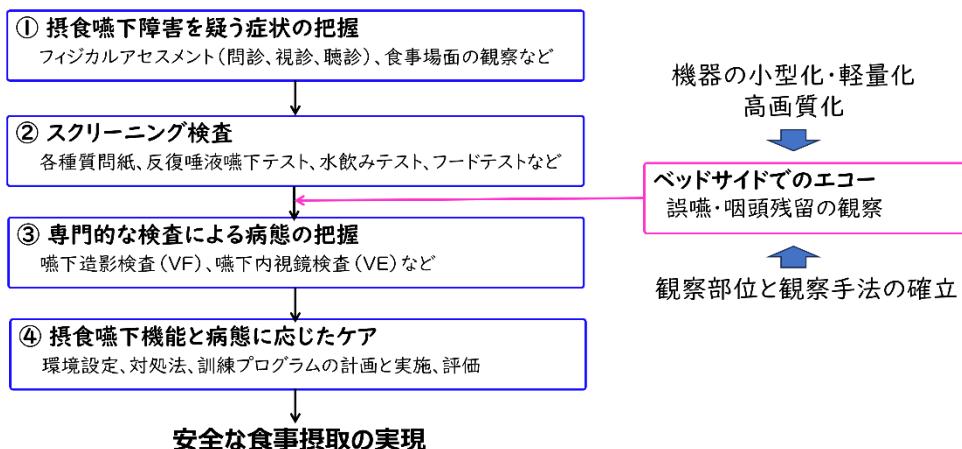
本講演では、演者が取り組む「摂食嚥下の可視化技術」による食事支援の革新について、研究の背景、技術開発、教育・普及活動、そして社会実装への挑戦が紹介された。

演者は看護師として病棟勤務中、誤嚥性肺炎で入退院を繰り返す高齢患者に多く接し、「口から食べることの尊さ」と「それを支える技術の必要性」を痛感した。大学院進学後、真田弘美教授の指導のもと摂食嚥下障害患者のケアについて研究を重ねた。2022年4月に社会実装看護創成研究センターに着任後も、「いつまでも食事を楽しめる社会の実現」を目指し、研究に取り組んでいる。

着任前に、脳卒中後遺症で嚥下障害を有する、在宅療養中の高齢者のケアに携わる機会を得た。訪問看護師とともにエコーを用い摂食嚥下時の咽頭残留の観察を実施し、この高齢者は交互嚥下を行うことで、ムセや窒息、咽頭残留を解消し、安全な経口摂取が可能であることを確認した。高齢者は食べたいものを食べることができ満足するとともに、訪問看護師も達成感を得ることができた事例であった。しかし、この事例以降は、エコー用いた観察技術の活用が現場では途絶えており、「技術の社会実装の重要性」と「研究者一人では限界がある」ことを痛感した。

摂食嚥下障害の可視化には、咽頭残留や誤嚥の観察が不可欠であり、エコーを用いることで喉頭蓋谷や梨状窩などの残留部位をリアルタイムで確認可能である。非侵襲かつベッドサイドで使用できるエコーは、スクリーニングから専門的検査への橋渡しとして有効であり、嚥下内視鏡検査などとの併用により精度が向上する。

エコーでの誤嚥・咽頭残留の観察の位置づけ



教育面では、嚥下ケアコースの中級（自己学習と客観的臨床能力試験による評価）までの教育プログラムを整備し、健康人を模擬患者とした技術習得を支援している。一方、教育プログラム終了後の実装に課題が残った。具体的には、摂食嚥下機能が低下した対象者の読影の難しさや個人差である。技術習得後の支援として、オンデマンド型のフィードバックシステムを導入した。受講者が撮影した画像に対し専門家がコメントを返すことで、現場での技術定着と画像品質の向上を図っている。将来的にはAIによる読影支援の導入も視野に入れている。

大学院生が行ったインタビュー調査では、エコーを用いた嚥下ケアにより、経口摂取を可能とするケアの選択肢が増え、訪問看護利用者の納得感を得るケアが可能になったことが確認された。スタッフ側も評価への納得感、情報共有、振り返りの機会が増加したことが確認された。また、咽頭残留が多い場合であっても、エコーで確認し残留物の喀出を促すことで安全に食事を継続でき、肺炎の予防に成功した事例もあった。これらの事例に共通したことは、看護師が自ら画像を取得し、積極的にケアに活用したことであり、エコーの実装に重要な促進因子であることを強調した。

また、遠隔システムによる講習の導入により、対面が難しい状況でも技術習得が可能であることを紹介した。スマートグラスに付けたカメラで、受講生の視野を追うことができ、受講生の意図を確認しながら技術評価ができるシステムである。

遠隔でのOSCE

画像は撮影の許可を得ています

Zoomで藤田医科大学(評価者)と現地受験者をつないで実施
受験者が視線カメラ付きのスマートグラスを装着しエコーをZoomに接続
評価者はリアルタイムにエコー画像と受験者のプローブ走査を確認

熟練者になると手元を見ない傾向



現地受験者の様子

評価者側のZoom画面

エコーを用いた嚥下ケアコースの受講者数・修了者数は順調に増加している。さらに、学部生や高校生への教育機会も拡大中である。大学院生や共同研究においても嚥下エコーの活用が進んでいる。

摂食嚥下の可視化技術は、食事の安全性と楽しみを支える重要なツールであり、技術開発のみならず、教育・支援・普及の仕組みを整えることで社会実装への道が開かれている。本取り組みは多くの支援者の協力によって成り立っており、演者は感謝の意を表するとともに、今後のさらなる展開に意欲を示した。

4. コンバージェンスサイエンスで挑む創傷・スキンケアイノベーション

社会実装看護創成研究センター 講師 光田益士

本講演では、「コンバージェンス（融合）」をキーワードに、異なる分野・技術・職種の交差によって生まれる新たな価値について、演者の研究活動を通じて紹介された。看護と工学、情報技術、企業との連携を通じた社会実装の取り組みが中心に語られた。

演者は、生体膜の脂質二重層に関心を持ち、分子構造や電荷制御の研究からキャリアをスタートさせた。プラスミノゲンという酵素に反応する生体材料を開発し、血栓溶解や創傷ケアへの応用に成功した。特許化された技術は、抗菌剤の徐放を制御する創傷被覆材として動物実験で安全性・有効性が確認され、感染予防と皮膚治癒の両立を実現した。

演者が看護分野との連携が進む中で、褥瘡予防に着目した。人工皮膚にセンサーを埋め込み、圧力とせん断応力を同時に計測するシステムを開発した。企業との協働により、褥瘡予防シート材の製品化に成功し、臨床現場では褥瘡や糖尿病性足潰瘍の症例に使用され、創閉鎖や再発防止に効果が確認された。

在宅ケア領域では、ケアマネジャー向けの褥瘡アセスメントスケールを開発した。医師や皮膚・排泄ケア認定看護師が使用する既存スケールと同等の精度を示し、現場での実用性を強調した。さらに、褥瘡の写真を撮影し、予防・治療計画を立案し、推奨材料まで提示するアプリを開発した。紙ベースからデジタルへの移行により、ケアの質向上が期待されている。

藤田医科大学教育病院看護部と共同で、高齢者の失禁関連皮膚炎（Incontinence-associated dermatitis: IAD）に関する研究を行っている。IAD の発症に関する細菌の可視化に成功した。具体的には、黄色ブドウ球菌が皮膚表面に定着していることを、培地を用いて証明し、IAD の予防・治療に新たな視点を提供している。

帝王切開後の肥厚性瘢痕予防に向けて、テープ材にかかる力の計測も実施している。人工皮膚と機械を用いて、テープの剥がれ方やひずみを分析し、より効果的なケア方法の開発を進めている。

藤田医科大学のオープンファシリティーセンターの設備を活用し、大学院生の研究支援を実施した。リンパ輸送のリアルタイム計測など、高度な機器を用い研究を展開することができた。

看護部との連携により、摂食嚥下、感染管理、NICU・GCU など多岐にわたる分野で論文作成を支援した（Yamasaki et al., 2022；梶川ら、2025）。国内外での学会発表も積極的に行い、複数の研究費を獲得、研究の持続性と発展性を確保している。台湾、スペイン、マレーシアなどの海外学会に参加し、国際的な研究者との交流を通じて自身の研究を深化させグローバルな視点を取り入れた研究活動を展開している。

看護部の研究支援



学会発表

看護理工学会2022（東京）
藤田医科大学病院 山崎さんら



日本環境感染学会2024(京都)
岡崎医療センター・梶川さん



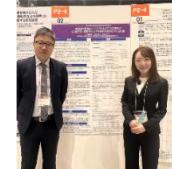
日本新生児看護学会2023(神奈川)
NICU/GCU 田代さん、矢野さん

No image → 論文掲載済

日本創傷・オストミー・失禁管理
学会2024(山口)
七栗記念病院・西山さんら



日本看護科学学会2024（熊本）
藤田医科大学病院 災害外傷センター・中島さん



日本看護管理学会 2025（札幌）
日本看護科学学会 2025（新潟）
藤田医科大学病院 佐野さん

TBA → 論文投稿済
論文投稿予定

本講演のテーマである「コンバージェンス」は、分野・職種・技術・組織の融合によって新しい価値を創出する力である。看護と工学、情報技術、企業との連携を通じて、社会実装を実現する場として「藤田医科大学社会実装看護創成研究センター」の役割が強調された。



文献

Yamasaki M, Kohta M, Miki T, Tamura S, Ishitani T, Ikoma T, Ishiyama Y, Kaigawa M, Sugama J, Mano K. Incidence and patient characteristics of aspiration pneumonia using a nursing screening model in an acute hospital. Journal of Nursing Science and Engineering. 2022; 9: 190-200.

梶川智弘, 光田益士, 西田梨恵, 須釜淳子. 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の5類移行後に
おける看護職員の手荒れ有訴率と関連因子. 環境感染誌. 2025; 40: 46-52.

シンポジウム2：看護職の知的実践を拓く：臨床現場と研究の架橋による人材育成

司会 社会実装看護創成研究センター 教授 村山陵子

1. 誰のために研究するのか：現場から問い合わせを立て続ける力

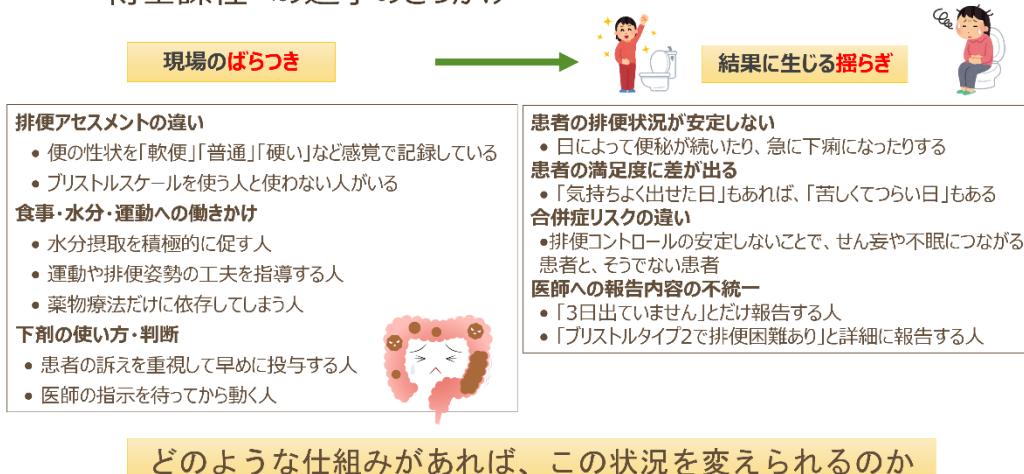
藤田医科大学病院 看護部 看護長
社会実装看護創成研究センター 特別研究員
佐野友香

本講演では、演者の藤田医科大学病院看護師としての歩みと博士後期課程での研究活動を通じて、臨床現場の課題を問い合わせに変え、実装へつなげる取り組みについて紹介された。特に「ケアのばらつき」への問題意識と、「可視化技術」の臨床応用が中心的なテーマとして語られた。

演者は2000年に藤田医科大学病院に入職し、6年間勤務後退職し、2013年に再入職した。現在は戦略担当看護師として勤務している。37歳で修士号、43歳でMBA(経営学修士)を取得し、2022年に藤田医科大学大学院保健学研究科博士後期課程へ進学し、2025年3月に50歳で学位を取得した。年齢を公表した理由として、「何歳でも学びは続けられる」というメッセージを伝えたかったためだと強調した。また博士後期課程修了は、周囲の支援によって成し得た成果であると感謝を述べた。

博士後期課程進学のきっかけは、現場で感じた排便ケアのばらつきであった。ブリストル便形態スケールの使用の有無、水分摂取や運動への働きかけの違いなど、アセスメントやケアにばらつきがあり、患者満足度にも影響していた。これを「仕組みで支える」必要性を感じ、研究への動機となった。博士後期課程では、以下の3つの研究に取り組んだ。

博士課程への進学のきっかけ



最初に、高度急性期医療を担う藤田医科大学病院における便秘有病率の調査を行った。病院全体では有病率は12.2%であり、診療科別では精神科が64.1%と最も高かった。「週に3回未満の排便回数」以外の症状を便秘の指標に用いると、36.8%が便秘と判断され、回数のみでは見落としがあることが判明した(Sano et al., 2024)。

次に、排便アセスメントにおける看護師のコンピテンシーを調査した。便秘の有病率が低い病棟では「便の色の観察」、「統一されたプロトコル」が関連していた。有病率が高い病棟では「アセスメントを高めたいという意欲」が関連していた。便秘有病率を下げるためには、統一した排便ケアのプロトコルと病棟全体の排便に関するアセスメント力を向上させたいという意欲の両立が重要であることが示された(Sano et al., 2025)。

最後に、訪問看護の排便ケアにおける携帯型エコー活用の促進・阻害要因について質的研究を行った。促進要因として「利用者の排便後の爽快感の表出」、「看護師間の画像共有」などが抽出された。阻害要因として「技術習得の困難さ」、「摘便から自然排便に移行する成功体験の不足」などが抽出された。初期導入時に阻害要因を減らし、促進要因を取り入れる仕組みが継続的な実装に繋がる。博士後期課程の研究は日本創傷・オストミー・失禁管理学会の研究助成金を受けて行い、現在論文投稿中である。

学位取得後は、戦略担当として「可視化」を意識した業務を推進してきた。携帯型エコーによる排便ケアはその一例である。問診や聴診では把握しづらい排便状況を客観的に評価し、不要な摘便や処置を減らし、スタッフ間の共通認識を支えるツールとして活用されている。「硬そう」「溜まっている気がする」といった感覚的評価から、「画像で見える」根拠ある評価へと変化し、ケアのばらつきが減少する。演者がこれまで感じていた研究と現場の距離が縮まるきっかけとなった。

博士後期課程修了者には、問題提起・分析・理論化の3つの能力が求められる。現場の問い合わせ研究に変え、仕組みに反映する力、根拠ある看護技術を普及・検証し、次世代の人材を育てる力が臨床看護師にとっての博士号取得の意義であると述べた。今後の研究テーマとして、「看護管理者がもっと楽に勤務表を作成するにはどうすればよいか?」という問い合わせを設定している。勤務表は患者の安全、スタッフの安心、チームの機能を支える基盤であるが、作成者の経験的な判断が多く、ばらつきが生じやすい。そのばらつきは、特にスタッフの不公平感や働きづらさにつながり、結果として現場全体のモチベーションにも影響する。看護管理者の勤務表作成にかかる時間を、AIを活用し削減することで、現場の状況や患者・スタッフと向き合える時間をさらに増やすことができると考える。AIを活用した勤務表作成の仕組みづくりを研究テーマとし、次年度の科研費申請を行った。

勤務表は“チームが機能するための土台”



基盤となるツール

- ・患者数による配置数
- ・スタッフの安心感、モチベーション
- ・健康に働くことができる
- ・チームのバランス

現状の課題

- ・看護管理者の経験に依存 → 質にばらつきが生じる
- ・看護管理者の公平感の揺らぎ
- ・スタッフのモチベーション低下

仕組みで安定性を確保

勤務表作成時間の削減→病棟の課題や患者・スタッフと向き合える時間の増加

研究は患者・スタッフ・現場のための道しるべであり、問い合わせの出発点は常に目の前の臨床にある。看護管理者はスタッフと共に問い合わせを育て、根拠ある実践を支える研究を続けることが重要であり、その姿勢こそが、自分自身と看護部を支える力になると締めくくられた。

文献

Sano Y, Sugama J, Hiroe K, Murayama R, Kohta M, Ishihara T, Mano K. Prevalence of constipation and associated factors in university hospital inpatients. Fujita Med J 2024; 10(4): 98-105.

Sano Y, Sugama J, Koyanagi H, Murayama R, Ishihara T, Mano K. Nurse competencies in defecation assessment related to constipation prevalence in a university hospital. J. Jpn. WOCM. 2025; 29: 27-40.

2. 認定看護師の実践を証明する：研究という次の一步へ

藤田医科大学病院 看護部 主任
藤田医科大学大学院 保健学研究科 博士後期課程 2年
田村茂

本講演では、「認定看護師の実践を証明する研究と次の一步」をテーマに、演者がこれまで歩んできたキャリア、摂食・嚥下障害看護認定看護師としての活動、そして研究を通じた実践の可視化と今後の展望について紹介された。

演者は 2002 年に藤田保健衛生大学を卒業後、耳鼻科病棟で看護師としてのキャリアを開始した。その後、脳神経外科、公衆衛生、回復期リハビリ、救急総合内科病棟など、24 年間にわたり「首から上の領域」を中心に看護を実践してきた。現在は保健師、摂食・嚥下障害看護認定看護師、NST 専門療法士の資格を有し、「食べる専門家」として活動している。

演者が認定看護師を目指した背景には、男性看護師としての将来のキャリアパスへの不安があったからである。当初はがん化学療法看護領域を検討していたが、第 2 教育病院の三鬼部長から「耳鼻科の知識を持つ摂食・嚥下障害看護認定看護師が必要」との助言を受け、摂食・嚥下領域への挑戦を決意した。眞野統括看護部長との面談を経て、1 年間の準備期間を経て受験し、認定看護師資格を取得した。

摂食・嚥下障害看護認定看護師として活動する中で、学会での研究発表を行ってきたが、自分の中では医師の助力をもらわないと自身の活動を表現できることに力不足を痛感していた。そのような中、藤田医科大学社会実装看護創成研究センターとの連携が始まった。須釜先生・光田先生の指導のもと、自分たちの実践がロジカルに組み立てられ英語論文として形になる経験を通して、自分でも認定看護師の実践を研究として表現できる人間になりたいと研究への意欲が高まった。高井看護副部長の後押しもあり、大学院進学を決意した。英語を基礎から学び直し、入学試験を経て進学を果たした。

大学院に入るきっかけ

実装センターとの研究



実装センターと研究でコラボレーション
須釜先生・光田先生に指導を受け
自分たちの「実践」が論文（しかも英論文）となることに感動！

「自分で認定の実践を
研究として表現できるようになりたい！！！」

最後の一押し



高井部長に相談
やめる理由はいくらでもあるけど
行く理由は「行きたい」で気持ちだけだろうだから
行きたいと思えるなら行ったほうがいいんじゃない？

摂食・嚥下障害看護認定看護師制度は20年が経過し、チーム医療や診療報酬加算の普及が進んでいる。院内の摂食機能療法の加算件数は増加傾向にあり、2025年には2016年の約3倍に達する見込みとなった。しかし、摂食・嚥下障害看護認定看護師の配置は加算算定の必須条件ではなく、制度的評価は限定的である。一方、皮膚・排泄ケア分野における褥瘡ハイリスクケア加算や感染管理分野における感染防止対策加算では認定看護師の配置は加算要件に含まれている。摂食・嚥下障害看護領域は社会的ニーズが高いにもかかわらず制度的評価が低いと感じている。このため、実践の成果を可視化し、エビデンスとして示すことが重要である。

藤田医科大学は1376床という日本最大級の病床数を有し、症例数・患者背景の多様性・関連施設の広さなど、臨床研究に最適な環境が整っている。大学や社会実装看護創成研究センターとの連携も密であり、質の高い研究指導が受けられる点も大きな強みである。

修士課程では「角度表示機能付きベッドによる嚥下残留の低減効果」をテーマに研究を実施した。機能付きベッドの使用により咽頭残留率が低下し、安全な食事支援が可能になることを実証した。この研究は国際学会で発表され、論文も国際ジャーナルにアクセプトされてインターネット上で公開された (Tamura et al, 2025)。自身の研究成果が形になったことに大きな達成感を得た。

博士後期課程では、自立した研究力、学際的な視野、国内外へのエビデンス発信力の養成を目指している。臨床の実践を研究に昇華させ、制度や政策に反映させることが最終的な目標である。

摂食・嚥下障害看護認定看護師の社会的価値を明示するためには、研究と論文によるエビデンスの積み上げが不可欠である。修士課程で得た基礎力を土台に、博士後期課程では研究設計・推進力を高め、臨床の実践を制度に反映させる力を育てていきたい。今後も臨床の中で研究を続け、実践の価値を証明し、看護の未来に貢献していく意欲が示された。

まとめ

- ・修士課程で培った
「文献検索・批判的吟味・論文作成」の基礎力を土台に
- ・博士課程では
「自ら研究を設計・推進する力」と
「嚥下CNの社会的価値をエビデンスとして提示する力」を養い
- ・その先に
「臨床の実践を研究に昇華させ、制度・政策に反映させる」
ことを目指していきたいと思っています

文献

Tamura S, Miura Y, Kohta M, Ikoma T, Ishitani T, Mano K, Sugama J. Beds with angle indicators and head lift function contribute to appropriate angles during eating and a low prevalence of pharyngeal residue. Advanced Robotics. 2025; 39: 959–969.

3. 大学院課程で育まれた探求心と俯瞰力が支える看護管理実践：臨床と研究をつなぐ人材の可能

藤田医科大学病院看護部 主任
藤田医科大学大学院 保健学研究科 博士後期課程1年
齋藤 祐也

本講演では、演者が大学院で得た学びを臨床にどう生かしているか、そして自身のライフワークとして取り組む研究課題について紹介された。臨床と研究の往還を通じて、看護師の働きがいと職場環境の改善に貢献する姿勢が示された。

演者は高度救命救急センターの救急救命室（emergency room: ER）に勤務し、フライターナースやドクターカーナースとして病院前救急から院内救急まで幅広く活動している。看護主任として部署管理にも携わり、看護管理実践にも取り組んでいる。2025年度に看護学修士を取得し、同年博士後期課程に進学した。臨床と学びを両立しながら、看護学の探究を続けている。

看護師6年目、コロナ禍の収束後にキャリアアップを考えていた時期、部署内では中核的存在となり、後輩教育も任せられ、自己流ではあるが、部署内の看護が良くなるように取り組んでいた。しかし、力を入れて教育してきた後輩がネガティブな理由で退職した際に、とても悲しく喪失感に襲われた。また、「個人のスキルアップだけでは限界がある」と痛感し、より多くの看護師に影響を与える活動を志し、大学院進学を考えるようになった。その頃、社会実装看護創成研究センターとのニーズ・シーズマッチングにおいて小柳先生と出会い進学への後押しを受け、大学院を受験し入学した。

大学院進学のきっかけ

看護感と葛藤

教育した後輩がネガティブな理由で退職した際に、とても悲しく、喪失感に襲われた。

一人の看護師が頑張っても、目の前の患者さんしか救えない。

自分の活動が、もっと多くの看護師のためになる取り組みをしたい！

- 自己の教育力を向上させたい
- 目の前の問題だけではなく、学問的発展による全看護師へ
- 臨床の実践家としても活躍し続けたい



大学院では「看護とは何か」、「看護学とは何か」を深く考える機会が多く、日本看護科学学会の定義に基づき、看護学は理論と実践の相互作用によって発展する学問であると理解した。さらに、石川県立看護大学・学長の真田弘美先生の「東京大学に医学部と看護学部しかない意味」に関する話からも、看護師は専門職者であると同時に学問者である必要があるとの認識を深めた。

臨床で培った「迅速な判断力」、「チーム連携力」は、研究や教育にも活かせる力であると実感している。経済産業省が提唱する社会人基礎力としての一前に踏み出す力、考え方力、チームで働く力一は、臨床と研究の両方に通じる力である。また、「研究と臨床の往還」すなわち、研究で得られた知見を臨床に還元し、臨床で生じた課題を研究へとつなげていくことが、看護学の発展支えると述べた。

演者の研究テーマは「中堅看護師のワークエンゲージメント向上」である。看護師の定着化が課題となる中、特に中堅層の離職は看護の質に直結する重大な問題である。ワークエンゲージメントはバーンアウトと対比される概念であり、離職率とも関連がある。演者氏はその中でも「上司からの承認行為」に注目している。承認行為は、部下の存在や成果を肯定的に評価し、それを伝える行為であり、自己効力感や職務満足感を高める要因と考えられる。

修士課程では、中堅看護師が受けている承認、望んでいる承認について調査を実施した。その結果、承認行為は「親密な交流」「支持的な相談・助言」「心地よい注目」「肯定的な業績評価」「承認行為のための環境調整」の5つに分類できることが判明した。

看護管理者が中堅看護師に行う承認行為



これを基に、看護管理者向けの教育プログラムを開発し、承認行為を実践できるようにするための教育コンテンツを作成した。

博士課程では、修士課程で開発した教育プログラムを実際に導入し、介入研究を通じて中堅看護師のワークエンゲージメントへの効果を検証する予定である。最終的には、看護師の定着化、離職防止、看護の質向上に貢献することを目指している。

本研究は、大学院指導教員、統括看護部長、看護部の皆様の支援によって進められており、深い感謝の意が述べられた。今後も臨床と研究を往還しながら、看護師が働きやすく、やりがいを持てる職場づくりに貢献していく意欲が示された。

文献

Saito Y, Koyanagi H, Mano K, Murayama R. An exploratory study of recognition behaviors practiced by mid-level nurse managers and perceived by mid-level staff nurses. FMJ. 2025; in press

シンポジウム3：看護部と創る臨床研究の新展開

司会 藤田医科大学病院 看護部長 高井亜希
司会 社会実装看護創成研究センター 准教授 小柳礼恵

1. 社会実装を加速する看護研究：多職種連携で実現する看護のチカラ

藤田医科大学病院 病院機能管理・JCI 対策室 看護長
宮下照美

本講演では、臨床現場における看護研究の加速と Implementation Science（実装科学）を活用した取り組みについて報告された。特に「るび×Lab.」の活動を中心に、臨床と研究の架け橋となる実践が紹介された。

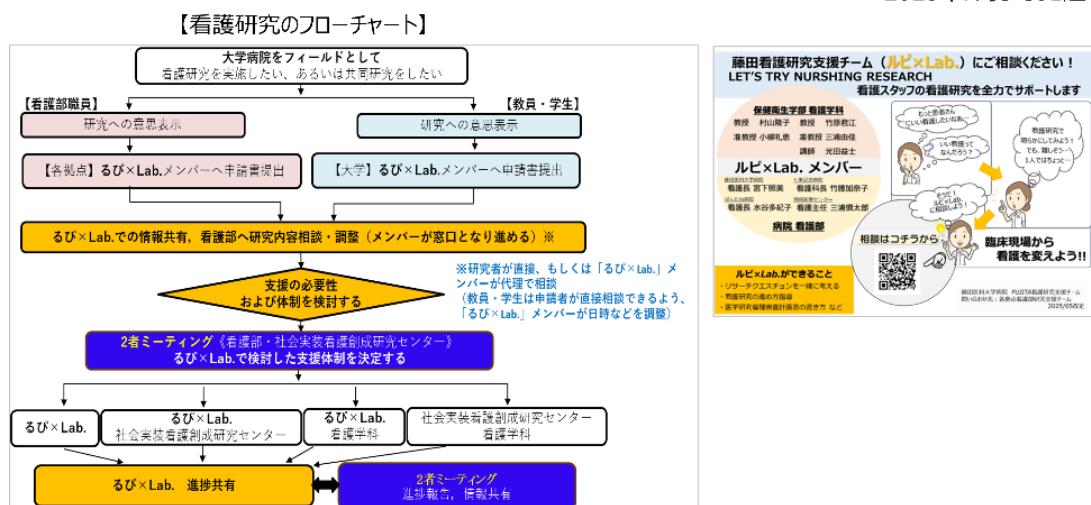
Implementation Science とは、エビデンスのある介入を日常の保健医療活動に効果的・効率的に取り入れる方法を開発・検証する学問領域である。看護管理者にもこの視点が求められており、特に電子カルテやレセプトデータなどの「リアルワールドデータ」の活用が鍵となる。しかし、現状ではこれらのデータが十分に活用されていないことが課題として指摘された。

臨床看護師が研究との両立を困難に感じる背景には、時間的制約、人材不足、体制の未整備などがある。QI (Quality Improvement) のギャップ図を用いて、エビデンスと実践の乖離が説明され、これを埋めるためには Implementation Science の視点を持ち、研究と臨床をつなぐ取り組みが必要であると述べられた。

高井らと社会実装看護創成研究センターによる共同研究において、藤田医科大学教育病院の看護管理者を対象に研究ニーズ調査を実施した。調査結果では、約 87%が研究に困難を感じ、67%が人材確保の難しさ、70%が知識不足を課題として挙げた。この結果を受け、藤田医科大学の 4 教育病院、社会実装看護創成研究センター、看護学科が連携し、2023 年度末に「るび×Lab.」を設立した。現在までに 51 件の研究が進行しており、看護研究の活性化に大きく貢献している。

看護研究体制の構築 るび×Lab.の誕生（2023年度末）

2025年7月まで51題

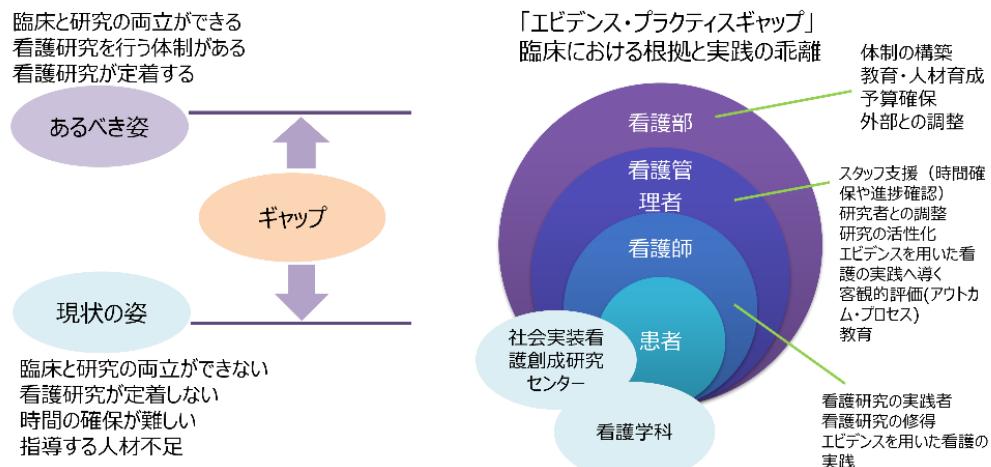


2024年7月、藤田医科大学病院では褥瘡発生件数が増加し、看護部として危機感を持って対策を開始した。データ収集のシステム構築、記録整備、スタッフ教育、物品管理、チーム強化などを実施し、褥瘡発生率は右肩下がりに改善した。各病棟に褥瘡チームを設置して、チーム機能の成果がデータからも確認された。

社会実装看護創成研究センター小柳先生と緩和ケア病棟との共同研究では、「体圧分布の可視化が看護師の褥瘡予防に関する知識・行動に与える影響」をテーマに、調査を実施した。体圧分布モニター付きマットレスを導入し、導入前後で病棟看護師を対象に知識テストを実施した。研究結果では、知識の合計点に有意差は認められなかったが、特に「原因と発生機序」の項目において、導入後の点数が増加する看護師が増え知識の上昇が認められた。病棟管理者からは、予防的ケアへの意識の向上、終末期患者へのケアのコツの習得、家族への指導の実施など、実践面での変化が報告された。新人看護師もスペシャリストから直接学ぶ機会を得て、自信を持ってケアに取り組む姿勢が育まれている。

臨床と看護研究を両立するためには、エビデンス・プラクティスギャップをどう埋めていくかということであるが、看護管理者がエビデンスを用いた看護実践を導く役割を担うことが重要である。実践の客観的評価、アウトカムやプロセス評価をデータとして示し、社会実装看護創成研究センターや看護学科と連携することで、Implementation Science を活用した定着が可能となる。今回のシンポジウムを契機に、看護の原点に立ち返り、専門職としての誇りを持って一步一歩前進していく姿勢が示された。

臨床の専門家が、臨床と看護研究を両立するために



2. 臨床の“気づき”から始まる看護研究と実践の質向上

藤田医科大学ばんたね病院看護部 看護長
水谷多紀子

講演では、日々の看護実践の中で得られた気づきが、どのように研究へと発展し、臨床現場に還元されていったかについて紹介された。看護師の感性と実践力が、組織的なケア改善と学術的成果につながるプロセスが丁寧に語られた。

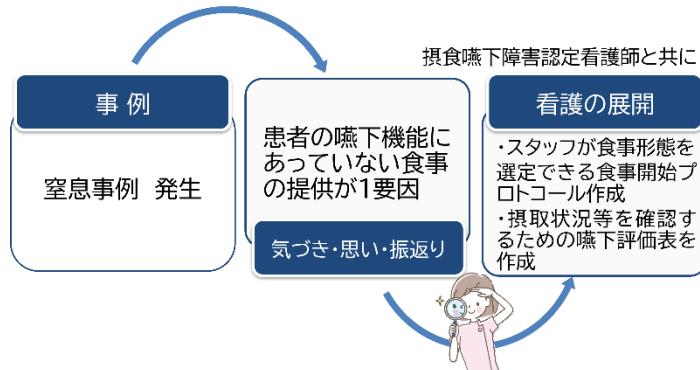
日常の看護実践において、患者との関わりの中で生じる「違和感」や「違い」は、看護の質向上への

重要な手がかりとなる。こうした気づきには、「より良い看護を提供したい」「患者の回復を支えたい」という思いが込められており、振り返りを通じて研究の出発点となる。

A 病棟で発生した患者の窒息事例を契機に、チーム全体で振り返りを実施した。検討の結果、嚥下機能に合わない食事提供が原因の可能性が浮上した。これを受け、摂食・嚥下障害看護認定看護師と共に連携し、嚥下機能評価体制を整備した。食事開始プロトコルと口腔ケアプロトコルを作成し、入院時からリスクを把握できる仕組みを導入した。スタッフ全員が共通の視点で食事介助に関われる体制が構築された。

臨床現場での事例

～1事例紹介～ A病棟



この取り組みは、社会実装看護創成研究センターとの連携により、実践報告として体系化し論文投稿に至った（野村ら, 2025）。問題意識の明確化から文献検索、テーマ選定、データ収集、結果分析、実践への応用まで、専門的支援を受けながら進行した。作成したプロトコルは A 病棟のみならず、全病棟へと展開され、入院時の誤嚥リスク評価が全体で実施可能となり、安全なケアの提供に寄与している。

さらに、入退支援室において嚥下評価や口腔状態の確認を行う体制を整備した。必要に応じて歯科受診につなげることで、入院前からリスク把握と早期介入が可能となった。この取り組みも学会誌で採択される予定であり、実践と研究の融合が進んでいる。

今後の取り組みは、以下の 4 つの柱を中心に行われる予定である。1 点目は、気づきから研究へつなげる文化の醸成である。日常の違和感を見逃さず、研究の種として活用する環境を創る。2 点目は、看護研究と臨床実践の好循環の構築である。現場で生まれた研究を実践に還元し、成果をフィードバックすることでケアの質を向上させる。3 点目は、研究支援体制の拡充とネットワーク形成である。社会実装看護創成研究センターとの連携を深め、多職種・他施設との共同研究を推進する。4 点目は、学会発表・論文投稿による発信と人材育成である。現場の知見を学術的に発信し、若手看護師にも研究・発表の機会を提供する。

今後の展望

1.「気づき」「思い」を研究へとつなげる文化の醸成

- 1)日常の看護実践において、違和感や違いを見逃さず、研究の種として活用

- 2)看護師一人ひとりが研究的視点がもてる環境づくり

2. 看護研究と臨床実践の好循環をつくる

- 1)現場発の研究を実践に還元

- 2)成果をフィードバックし、患者ケアの質を継続的に改善

3. 研究支援体制の拡充とネットワーク形成

- 1)社会実装看護創成研究センターとの連携を深化

- 2)多職種・他施設との共同研究を推進し、成果を広く共有

4. 学会発表・論文投稿を通じた発信

- 1)現場の知見を学術的に発表することで、看護の発展に寄与する

- 2)若手看護師にも研究・発表の機会を広げ、次世代育成へ

今回の取り組みを通じて、日々の看護実践の中で感じる違和感や疑問が、看護の質を高める重要な一步となることが改めて確認された。今後も、患者にとってより良い看護を提供するため、臨床と研究の両面から継続的な取り組みを進めていく姿勢が示された。

文献

野村 有香, 三鬼 達人, 本多 吾也子, 林 雅子, 中島 由貴, 松浦 広昂, 須釜 淳子. 窒息事例から食事開始プロトコールを導入して: 整形外科病棟での取り組み. 日摂食嚥下リハ会誌. 2025; 29: 22-26.

3. エビデンスに基づく看護の実践：クロスオーバー試験によるワイドシートの効果の検証

藤田医科大学七栗記念病院 看護部 看護長
西川圭二

本講演では、臨床現場での疑問を出発点とし、社会実装看護創成研究センターとの連携を通じて、研究の実践と成果を得たプロセスが紹介された。

第三教育病院ではこれまで看護研究に取り組んできたが、事例報告や事例発表を中心であり、臨床の疑問を可視化し、研究へと発展させることができた。2021年、社会実装看護創成研究センターとのマッチング会に参加し、IAD（失禁関連皮膚炎）や尿路感染症に対する陰部清拭用ワイドシート導入の効果について相談した。アウトカム評価や調査費用の課題があったが、センターの支援により研究として形にすることができた。

2022年度より、陰部清拭用シート「ベリケア」の使用前後で細菌数を調べる介入研究を開始した。社会実装看護創成研究センターの支援により、Teamsでの継続的なミーティング、説明方法の検討、研究手順の整備などが行われた。三重県までの訪問指導も実施され、検体採取方法の統一や物品管理な

ど、実践的な支援が提供された。さらに、日本創傷・オストミー・失禁管理学会の研究助成金申請のアドバイスを受け、調査費用の確保にも成功した。

社会実装看護創成研究センターからの支援

- ・陰部清拭用ワイプシート
「ピュレル®シュアステップ™ペリケア」
(以下ペリケア)の使用前後の細菌数を介入研究



Teamsでのミーティング	当院での直接指導	研究助成金申請
研究内容を検討 患者家族への説明方法の検討	物品説明 検体採取の統一 →検体採取は1名で実施する	日本創傷・オストミー・失禁管理学会の研究助成金を受け、調査費用を捻出

研究は単施設ランダム化比較クロスオーバー試験として実施した。対象は回復期リハビリテーション病棟に入院する20歳以上の排泄におむつを使用する患者とした。除外基準を明確に設定し、平均在院日数60日という施設特性を活かした設計となった。サンプル数は26名(各群13名)で、ペリケアと従来の陰部洗浄をクロスオーバーで実施した。菌数の変化を比較した結果、ペリケア使用群では菌数が有意に減少し、導入に向けた根拠を得ることができた。

本研究により、七栗記念病院として新たな研究体制のスタートを切ることができた。精度の高い研究設計、助成金の獲得、エビデンスに基づいた看護実践の推進が可能となった。日常の看護実践を数値化し、質の向上につながる方法を導き出すことができた。職員の研究意識も高まり、次の研究課題の提案が出るなど、組織全体のモチベーション向上にも寄与している。2024年度には看護研究の発表件数が増加し、論文投稿も3件達成した。英語論文の投稿も進行中であり、2025年度にはすでに9件の発表が採択されている。

今後は、今回の研究成果を臨床現場で活用し、新たな臨床疑問を可視化して看護研究へとつなげていく。エビデンスに基づいた看護の実践をさらに推進し、スタッフがシンポジウムや学会に参加することで研究に触れる機会を増やし、人材育成にもつなげていく方針が示された。

まとめ

① 新たな挑戦へのスタート

- ・より精度が高いと言われているクロスオーバー試験の介入研究ができた
- ・研究助成金の申請により、調査費用を捻出できた

② 看護の質の向上

- ・疑問を可視化できることで、エビデンスに基づいた看護につなげることができた
- ・日頃の看護実践の結果を数値化することができ、さらに質を向上していく方法が導き出せた

③ 職員の研究心の育み

- ・今回の研究を行うことで、スタッフから次の研究課題が提案され、研究に対する意識が変わり、モチベーションにつながっている

文献

Nishiyama T, Kohta M, Nishikawa K, Takekoshi K, Shioji Y, Sugama J, Matsushima A. A pilot randomized cross-over trial assessing the effectiveness of disposable wet wipes for the reduction of bacterial colonization on genital skin in hospitalized patients. J Jpn WOCM. 2025; in press.

4. 看護研究取り組み支援の連携

藤田医科大学岡崎医療センター 看護部 看護科長
福本由美子

本講演では、施設単位で行う看護研究の課題と限界を踏まえ、社会実装看護創成研究センター、「るび×Lab.」による支援により、看護研究の質向上と継続的な実践への還元を目指す取り組みが紹介された。

看護研究は、日々の実践の中で生まれる疑問を科学的に検証し、より良いケアを提供するための重要な活動である。患者の安全や満足度の向上、看護師の専門性の強化にもつながる。しかし、施設単位で研究を進めるには限界がある。看護師の教育背景は多様であり、研究経験の有無によって準備状態（レディネス）に差がある。特に専門学校や短大卒業者は研究経験が乏しい場合が多く、画一的な指導では対応が難しいという課題がある。

施設単位での看護研究の現状と課題

1) 教育背景の多様性

研究に取り組む前のレディネスの差

2) 業務との両立の難しさ

研究活動が後回しになりがち

3) 研究指導者の不足

研究指導ができる人材不足

4) 成果の限局性

学術的な論文発表まで発展しない



岡崎医療センターでは、大学院修了者を中心とした看護研究支援チームを設置し、症例報告や実践報告レベルでの学会発表を支援している。現場の看護師にとっては心強い存在であるが、支援者自身も日常業務を抱えており、時間的・専門的な限界がある。特に研究デザインや統計分析など、専門的知識が求められる場面では外部との連携が不可欠である。

研究を進めるためには、文献検索、統計ソフトの利用、データベース環境などが必要であるが、第一教育病院以外の拠点では図書室すらないため場合もあり、資源が不足している。看護師が「研究したい」と思っても、継続が困難であるという声が多く聞かれる。

このような状況の中で、「るび×Lab.」による支援は非常に有益である。特に以下の点で効果が高いと言える。1つ目として、臨床の疑問を学術的に整理・構造化することで、研究として成立させることができ可能となった。2つ目として、計画書作成のプロセスを通じて、看護師自身が研究的視点を持ち、次の課題を見出す力が育まれた。3つ目として、倫理的配慮を踏まえた調整や、適切な収集方法の提示により、安心して研究に取り組むことができた。4つ目として、論文構成、表現方法、投稿規定への対応など、専門的な支援により、施設内で完結していた研究が学術的に発信可能となった。これらの支援により、理論と実践の統合が促進され、科学的かつ実用的な看護の発展につながっている。

施設単位で行う看護研究には限界があるが、「るび×Lab.」の支援により、研究の質は確実に向上している。研究は研究者だけのものではなく、実践と学術が協働することで意味を持つ。最後に、看護の未来を共に築くことの重要性が強調された。臨床と大学が連携し、共同することで、より良い看護の提供と看護職の専門性向上が実現できる。現場と学術が手を取り合い、看護の未来を共に作り上げていく姿勢が示された。

臨床と大学の架け橋を築くために必要なこと

研究文化の醸成

臨床現場と大学の双向コミュニケーションを強化し、互いを尊重する文化を育む

支援体制の整備

看護部ラダー教育を活用し、継続的な教育プログラムを提供



研究時間の確保

シフト調整や研究日の設定など、組織的に支援する

成果を臨床に還元

研究成果が臨床現場にどう還元されるかを明確にし、研究に取り組む看護師のモチベーション向上につなげる

本講評では、各講演を通じて明らかとなった看護研究の広がりと、臨床現場への社会実装の成果について総括された。

センター長講演：冒頭講演では、センター設立に至るまでの経緯と、実装科学の4ステップを看護部・看護学科に展開してきた取り組みが紹介された。現場の聞き取りを起点とした着実な研究推進、論文数の増加、臨床の多忙さの中でも研究に取り組む姿勢が印象的であった。

シンポジウム1－1：エコーを活用したアルゴリズム開発、阻害・促進要因の分析、チャンピオンナースとの協働など、現場に根ざした実装研究の好例。国内外への発信力も高く、藤田医科大学の研究力を示す内容であった。

シンポジウム1－2：排便サポートチームの構築、エコーによるアセスメント、認知症患者への対応など、臨床課題に対する実践的な取り組みが評価された。透析患者など他領域への応用も期待される。

シンポジウム1－3：「いつまでも食事を楽しめる社会」を目指した取り組みは、栄養介入だけでなく、患者の尊厳に直結する重要なテーマ。誤嚥リスクの可視化と食事支援の可能性が広がる研究である。

シンポジウム1－4：アプリやシート開発、国際学会への発信など、多職種連携による研究の広がりがセンターの発展に寄与している。

シンポジウム2－1：ケアのばらつき・揺らぎの解消を目指し、「誰のための研究か」を問い合わせ続ける姿勢が印象的。研究が自己成長と看護部の支えにつながるというメッセージは、多くの看護師に勇気を与えるものであった。

シンポジウム2－2：英語論文のアクセプトに至るまでの過程が共有され、研究成果が社会に届く喜びが伝わる内容であった。

シンポジウム2－3：後輩の退職という経験から生まれた研究が、中堅看護師の離職防止へつながる。職業人としての視点からの研究は、看護の可能性を広げるものである。

シンポジウム3－1：ロボティックマットレスの導入による褥瘡発生率の改善、看護師の声かけによる実践の変化など、研究と実践の融合が見事に示された。

シンポジウム3－2：日常の気づきから研究へつなげる姿勢は、医師の視点とも共通し、臨床と研究の距離を縮める好例であった。

シンポジウム3－3：高精度な研究デザインの実施、助成金獲得、臨床への成果還元の流れが確立されており、施設研究のモデルケースとなる。

シンポジウム3－4：研究環境が整っていない中でも、「るび×Lab.」の支援により論文発表まで進められたことは、臨床看護師にとって大きな力となっている。

最後に総括と今後への期待が述べられた。本シンポジウムを通じて、臨床現場の課題を研究として深め、その成果を実装し、教育へと還元する好循環が確立されていることが確認された。これは藤田医科大学および社会実装看護創成研究センターが築いてきた成果であり、今後の5年間においてもこの循環がさらに広がることが期待される。改めて、センター設立5周年を祝し、今後のさらなる発展を祈念し、講評が締めくくられた。

おわりに

社会実装看護創成研究センター5周年記念シンポジウムを行い、あらためて藤田医科大学の看護の根底にある「より良い看護を実践する」という気概を実感した。おそらく、社会実装看護創成研究センターの設立が引き金となり、臨床看護研究に良いことを積極的に吸収し、必要なことを即座に実行に移し、結果的に4教育病院の多部署での看護研究への期待に火がつき、広がりを見せたと考える。

2024年に文部科学省から全国11校目の「橋渡し研究支援機関」に認定されたことを契機に、藤田医科大学では研究力向上に向けた潮流が高まっている。看護においてもこの流れにしっかりと乗っていく必要がある。センターの次の5年間の目標は、「るび×Lab.」で支援する研究の質向上に向けた取り組みの強化である。具体的には以下の3点である。1つ目は、研究成果をエビデンスとするための論文化のプロセスを根付かせる仕組みを構築することである。2つ目は、柱となる研究テーマの核をもつことである。このためには、大学、臨床の共同研究チームの構築が必要である。3つ目は、博士後期課程を修了した大学院生の臨床看護研究実践のステージを構築することである。このステージにおいて大学院生は社会実装看護創成研究センターの特別研究員としてキャリアを積み、臨床看護研究の主導や科研費等の研究費を獲得できる体制を整えることである。

設立から今日まで、社会実装看護創成研究センターの活動にご理解とご指導を賜りました石川県立看護大学学長・真田弘美先生、藤田医科大学前学長・才藤栄一先生、副学長・金田嘉清先生、保健衛生学部長・長谷川みどり先生、保健衛生学部前看護学科長・三吉由美子先生、看護学科長・世古留美先生、看護学科教育各位に感謝申し上げます。また、5年間変わらぬ熱意と期待を寄せ続けていただきました藤田医科大学統括看護部長・真野恵子様、藤田医科大学病院看護部長・高井亜希様、ばんたね病院前看護部長・相原晶子様、看護部長・三鬼達人様、七栗記念病院看護部長・松嶋文子様、岡崎医療センター前看護部長・小島菜保子様、看護部長・小野布佐子様、看護職員各位に心から御礼を申し上げます。最後に、5周年記念シンポジウムを豊かな経験とチームワークで運営いただきました大学院生の皆様に深謝申し上げます。



シンポジウム

01

ケアの質を革新する看護技術の社会実装

演者：村山 陵子・小柳 礼恵・三浦 由佳・光田 益士

シンポジウム

02

看護職の知的実践を拓く：

臨床現場と研究の架橋による人材育成

演者：佐野 友香・田村 茂・齋藤 祐也

シンポジウム

03

看護部と創る臨床研究の新展開

演者：宮下 照美・水谷 多紀子・西川 圭二・福本 由美子

藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター設立5周年記念シンポジウム
テーマ「社会実装を志向した看護学研究の展開：技術革新・人材育成・臨床連携の5年間の実績と展望」

プログラム 2025.9.6 [Sat] 13:00~16:15			
13:00-13:05	開会の辞	藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター センター長/教授 須益 淳子	須益 淳子
13:05-13:10	祝辞	藤田医科大学 病院創立本部 総務部部長 藤田医科大学茨城 先端医療研究センター 事務部長 眞野 康子	眞野 康子
13:10-13:25	社会実装看護創成研究センター設立から5年間の歩み	藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター センター長/教授 須益 淳子	須益 淳子
13:25-14:25	シンポジウム ① ケアの質を革新する看護技術の社会実装		
	司会 藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター センター長/教授 須益 淳子		
	■ 第6のフィジカルアセスメントツールとしての エコーカラリゼーション技術の開発・普及：末梢静脈カーテル留置技術	藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター 教授 村山 殿子	村山 殿子
	■ 排泄ケアのイノベーション： 多職種連携とテクノロジーで実現する尊厳ある排泄ケアの未来	藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター 准教授 小橋 礼恵	小橋 礼恵
	■ 認知症下の可視化がもたらす新たな食事支援	藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター 准教授 三浦 由佳	三浦 由佳
	■ コンバージェンスサイエンスで進む創傷・スキンケアイノベーション	藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター 講師 光田 勲士	光田 勲士
14:25-14:40	休憩		
14:40-15:25	シンポジウム ② 看護職の知的実践を拓く：臨床現場と研究の架橋による人材育成		
	司会 藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター 准教授 村山 殿子		
	■ 産のために研究するのか：現場から問いを立て続ける力	藤田医科大学病院 看護部 看護員 藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター 研究研究員 佐野 友香	佐野 友香
	■ 認定看護師の実践を“証明”する：研究という次の一步へ	藤田医科大学病院 看護部 主任 藤田医科大学大学院 保健学研究科 博士後期課程2年 田村 茂	田村 茂
	■ 大学院課程で育まれた探究心と創意力が支える看護管理実践： 臨床と研究をつなぐ人材の可能性	藤田医科大学病院 看護部 看護師 看護師教員センター 在籍 藤田医科大学大学院 保健学研究科 博士後期課程1年 南藤 祐也	南藤 祐也
15:25-16:05	シンポジウム ③ 看護部と創る臨床研究の新展開		
	司会 藤田医科大学病院 看護部 看護課長 斎井 亜希 藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター 准教授 小橋 礼恵		
	■ 社会実装を加速する看護研究：多職種連携で実現する看護のチカラ	藤田医科大学病院 病院看護部-JC研究室 看護技師 宮下 丽美	宮下 丽美
	■ 臨床の“気づき”から始まる看護研究と実践の質向上	藤田医科大学大学院人間社会学系 看護部 看護技師 水谷 多紀子	水谷 多紀子
	■ エビデンスに基づく看護の実践： クロスオーバー試験によるワープシートの効果の検証	藤田医科大学七洋記念病院 看護部 看護技師 西川 圭二	西川 圭二
	■ 看護研究取り組み支援の連携	藤田医科大学附属医療院 看護部 看護科 福本 由美子	福本 由美子
16:05-16:10	講評	藤田医科大学 資深助教 学習指導/ 看護学科 教授 長谷川 みどり	長谷川 みどり
16:10-16:15	閉会の辞	藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター 講師 村山 殿子	村山 殿子

● 藤田医科大学

Appendix 2：運営組織

シンポジウム主催

保健衛生学部社会実装看護創成研究センター

センター長・教授 須釜淳子

教授 村山陵子

運営委員：光田益士（委員長）、小柳礼恵（記念品担当）、三浦由佳（懇親会担当）

実行委員：

受付：影浦直子、小笠原ゆかり、河西将志、又吉真由美

会場誘導：前田初美、河裾永恵、北野ゆりか、相原晶子

PC：富田元、石龜敬子

写真撮影：山本駿、沼田悠希

計時：遠藤真穂、酒井沙羅

記録：齋藤祐也、桂川清多、小林南菜子、内藤千尋、伊藤千佳、田村茂

広報・ポスター作製：松田奈々

Appendix 3：記念品



ボールペン



ペーパーウエイト

Appendix 4 : 会場内写真



統括看護部長・眞野恵子様からのご祝辞



冒頭講演・センター長 須釜淳子



シンポジウム1の司会＆演者



シンポジウム2の司会&演者



シンポジウム3の司会&演者



長谷川保健衛生学部長、世古看護学科長を囲んで